

---

# Cotton Candy 1

蜜月めぐむ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

C o t t o n   C a n d y   1

### 【Nコード】

N 8 2 7 2 E

### 【作者名】

蜜月めぐむ

### 【あらすじ】

中性的な僕に積極的にアプローチしてくる彼女。それには彼女の悪夢のような過去が関係していた。僕には彼女の心を癒すことができるだろうか…。せつないラブストーリーの序章。

## (前書き)

性的な表現を若干含んでいます。苦手な方はご遠慮ください。

彼女「チヨコ」のふんわりとしたライトブラウンの髪から、甘いフルーツ系の香りが漂う。

そつと顔をうずめてみた僕の耳に、チヨコの声が響く。

「佐藤ちゃんなら、好きになれるかも。だって、佐藤ちゃん、男でも女でもないから…」

氷のかけらを呑み込んだように、僕は固まった。

チヨコの言うことは、正しくはないけれど、はずれでもない。

僕は、生物学的には男だけれど、高校生にもなって声変わりすらしていない、男性として成熟していない上に、性欲というものを感じたことがない。

自分にとっては何ら不都合はないけれど、親からは心配され、周りからは誤解される。

そんな僕に興味を示して、半ば無理やり彼女になったチヨコ。今もこうして何かを確かめるように大胆に体を合わせ、僕の反応を試してきた。そんなチヨコの、本当の気持ち、正直僕は量りかねていた。だから彼女の発言は、その疑問に答えるものだった。

さらに、この胸に浮かんだ疑問に答えるようにチヨコは話し出した。「わたし、小さい時、ひどい目にあってるんだ。聞いてくれる？」

「話すのがつらくないんなら、聞くよ」

つらい話の予感がした。でもチヨコからは「話さなければならぬのだ」という、覚悟が伝わってくる。僕も覚悟をきめた。

「話したいの。」

チヨコは、僕から体を離すと、ベッドの縁に腰かけ、深呼吸した。

初めてその人に会ったのは、遊園地。ゲートで手を振っていた。

お母さんの背中に隠れてモジモジするチヨコに、その人はニッコリ笑い、ハート型の風船を差し出した。

お母さんの、嬉しそうな顔、二人に手を繋いでもらい、ブランコのように揺らしてもらって歩く道。

遊び疲れ、いつ眠ったのか、目覚めたら、大きな背中に負われていた。

そして、そのままその人は、「お父さん」になった。

チヨコのお母さんは料理教室の先生をしていて、時々、日曜日に仕事に出る。

そんなときは、チヨコはお父さんと二人きり。二人でテレビを見たり、絵本を読んだりして過ごした。

夏のある日、バスルームから、お父さんが呼んだ。

「チヨコ、水遊びしようよ」

バスルームを覗くと、泡の出る入浴剤でモコモコ泡立つ浴槽を、お父さんが掻き混ぜている。

「わあ、面白そう！私も入る！」

指がふやけるほど泡で遊んでいるチヨコを、目を細めて見ていたお父さんは

「そろそろ、出ておやつにしよう。体をきれいにしなきゃね」そういうと、手に石鹸をつけ、くすぐりたいほど念入りにチヨコの体を洗った。

と、突然お父さんがうるたえた声で言い出した。

「そういえばこの入浴剤、お母さんに『使っちゃダメ』って言われてたんだっただ！」

「えー？どうしよう」

「チヨコ、内緒にしてくれる？今日のお風呂のこと」

「わかった…」

泡のお風呂はとても楽しかった。チヨコは生まれて初めてお母さんに秘密を持った。

「それが間違いだつたの。それから、何度か一緒にお風呂に入ったけど、どんだんエスカレーターしてきた。でも罪悪感みたいなものを感じてお母さんには言えなかったの。」

チヨコは唇を噛み締めた。僕は、横に腰掛けて、肩を抱いた。

「もう話さなくていい」

「だめ！聞いて！」

チヨコの強い語気に、僕はたじろいだ。

「…お願い。最後まで聞いて…」声が震えている。

やがてチヨコは小学生になり、お母さんのお腹には、チヨコの弟か妹が、まあるくなつて生まれる日を待っていた。

そんなある日、チヨコのお母さんが切迫流産で入院しなければならなくなつた。

「お義母さんにきてもらおうかしら。それともチヨコをうちの実家に預ける？」

「いや、僕がいるから大丈夫だよ。仕事はうちでもできるし。どうにも困つたら君の実家にSOSするよ。ね、チヨコ、僕たち仲良しだから大丈夫だよね？」

チヨコに微笑みかけるお父さんの目は『お母さんに心配かけちゃだめだ』そう言っているようで、チヨコは頷くしかなかった。でも本当は、少し怖かった。

お父さんは、一緒に家事をしたり宿題を見てくれたり、普段と変わらず優しく、チヨコはほつとした。

「お風呂に入ろうつて言われたらやだな」ずっとその心配ばかりしていたけれど、そんなことも取り越し苦労だった。

二日目からチヨコはもう、何の心配も警戒も、するのをやめた。

「う、ん」寝苦しくて目が覚めるとチヨコの上に誰かがいる。

チヨコの両膝を持ち上げて広げている。

怖くて声が出ない！痛い！焼けるような痛みが走る。

「チョコ、これは夢だよ、大丈夫、大丈夫」荒く酒臭い息をはずませ、押し殺したような低い声がささやく。

夢？夢でも嫌だよ、助けて！痛くて体が裂けそう！

「いやあつ！助けてお母さん！」

そのとたん枕を顔に押し付けられ、後のことは覚えていない…。

チョコはせきをきったようにそこまで一気に話すと、突然笑いだした。自分自身を嘲るような笑い方で。でも頬には光るしずくが零れている。僕は、そつと指先でしずくを掬った。

「結局、お母さんは流産して、『お父さん』とうまくいかなくなつて別れたの。赤ちゃんのことは悲しかった。でも別れてくれてよかった、つてホツとした。『あんなひと、いなくなっちゃえ』つて思った。でもね…」チョコは立ち上がり、僕の部屋のブラインドを指先で弾いた。傾きかけた午後太陽が光る。

「死んだ、つて聞いたとき、涙が出たの。なんでかなあ。可笑しいよね。サイテーな男なのに。」

僕は後ろからそつと抱いた。

「『お父さん』つて呼べる人が、他にいないの…」  
すすり泣きがやがて号泣に変わり、そしてその雨がやむまで、僕はただ、立ち尽くし肩を抱いていた。チョコの悪夢、体に刻みつけられた痛みは、一生消えないのだろうか。消え入りそうな声が腕の中から聞こえる。

「男は嫌い」ブラインドから西日が、チョコの髪に茜色のストライプを映す。

「ねえ、チョコ。僕は男でもなく女でもない、ただの僕として、君を愛せるかもしれない。」

唇に触れると、チョコとの関係は綿飴のように溶けて崩れるだろう。だから僕は、チョコの髪にそつとキスをした。

(後書き)

初めての投稿です。ご批評はお手柔らかに。次作では彼にクローズアップ。また読んでいただけると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8272e/>

---

Cotton Candy 1

2010年10月12日14時55分発行